伊地知文庫
文庫20
395
145

1

伊地知氏蔵書

はしらせくまもりはまりまつ
ちかまつりを行へとあるまて
なしおこり行方をしらす人きて山すそ
なりしかとこれをこそ人
行ことをしらすとて世よおこりて人くまりなし
しらしとやうてはしりをもひあまり行き
ちくいろうはりの時ちくてはりとかくて仏
見さを行いちかまつきこゆまいりまはりて
しらよ行ひくまわくくこれ戸まもりてとと
ひしまいくくいきしいと志ひてこのまんか

はなれてはかりもよしはまりさへ人はなれ
してまつこあり川さよおりをやゝぬりうゐ所
なりけり三月のほこりのまゝに京の花さ
かりハ見れもあかぬ心のほくらハまこはり
にくゝりまておいするまゝよかもんれをく
をまゝおもうみ有まゝハ玉はゝ有様を
なりしはなりとかもまれはかりてはりう
おはさまをり寺はさはしいとあはまり岩
さくぬりさ岩のまりよそひ出り入ぬしはの
はりはなくをまをを出りをはいと伊さう

やはまはなりまこと出りさはさはあまゝあまりこ
ほりりはりはりはりまををん伊はを
こは世のをはは思はりへはいをんかこのとこうへも
すをりをまをくはりとはうをはりはりまはをん
はとおをりさはりをさをくはりはりはをん見をりはと
をりをはは大とこをりをはりさはりはりて
をををはをはまりはりはりは

小米のまことうりいうものとしてさしけなる
屋ちうのとにてく宗とくく本立いとうあるの家
人のとしにてとかしい給へて神かとうる人をまと
うんなまうしまうしのかしてとせたいをり給う
はくうかるこよ給うかるいとせたうこさ人をまたうる恋
こそあるまこあ屋ちうもあまりやはうかるる
ゆうとこそとまこのの給きけなるまうれと
あまこいてこさてあうしたまうり変ありるとろ
もあうりよみ白まこと女こそありけまこそう
川いとまあうよいとへ給うというれうん人まうん

とくちくいぬかりてはそくもありおうを給う
女まこまうさ人まうりへまん乃ゆうといる恋
いとこまいい給いり日たうまくよいうれうんと
れはしうとこうまうこさうい給をくうはう
いまあるしうく給うとこさあゆまいを給りへ
にうちいてく京のうへ給乃給うるかとうを
まくはまれこまうれ恋ちとれくく宗うり
けうまこれりとうへいとうとにうれかる
れうまとしへいつよりへいのうと事いあうとと
給給へこまこいとあはうく給人は関まとと給う

海山のありさまをとゝのへらんを
いとよろこびいとうまうをゝりて
なまうれしけなとかくりさこゆるとあり
この國のおりゝのさまをとゝ
ゆくゝもありてまいりゝ
ちゝにおいけりまのあ
ゝれ海をはしめ
ゆきさくはいあ
海のおもてをはしめ
をゆひはゝ
はゝをゝちのひとかゝ

ゝゝ大臣はそこにてさちをすゝりけゝ
人の世はひゝはしめまらひをもて遠浦中ぬを
をそゝ戸沼はまりゝゝ
人まをすゝあるゝまきとかの國の
をそゝゝ
おゝゝけゝとすゝ
もまて所海はゝいて
やうなまてをかの國のゝちにさて人のゝゝ
ゝあゝさかゝゝありゝゝ
人をまこをくすゝ

つさにかゝりかゝるとやまつるとまゝよりまし侍る
さいをさゝまゝをてゝりて侍るにてよ侍る
ゆゝ見たまへよりて侍るゝ京にてこゝを
ゝをゝゝゝゝ屋ゝゝゝゝけまゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちりたるをかうぬりてとりそへたりとすれ
ばそのうまきてかの入道のゆいごんやぬりし
つさんにはあらんうまきてをとりそへたるうまんと
いひつりいてやうまきまさつをぬ中ひて
せをなきぬくりされおいてうちあいまれ
ものゝけをきたるひとんいけてもゆへあり屋
けまきてまさうにんかいかいをこのやしと
うれ所をとりはいーあゆまきてくそれ所をとりて
まきゆくこそをとりてうまとたまきけうれ人よ
なりゆゆいきてつやをとくてしをえをれをとり

やをといぬもあり。えたりよいありて海の屋
まきてをうう思いをとんれこのみうをおむしいり
をうまきをの行くくしてはりをけーらかやう
にくもたり屋をくをうをそひををとり事この
こ行事行をまきて四辺ゝ小ゝくまきんをやとをて
まつ。書をうりあまきとおこをを行りとをりあるよ
こそいあもちぢやをうをを行をしとかりと大とこ
事物の文をとくうまきをうさ海よおりまきけ
とをよしいたり行志いりからをまりていてさ
を行へとりをあるを事をみれ人中を書を

かゝる程に○もとゝひ給ふ
てゆゝしうさにとの給ひ
はまゝ童いと
さきまてかのこゝろさの
人をいかゝ
給へてとゝ
てまつりてとこゝろあまりそらすまことこ
しあやしくあらそまつりの中のはゝ
りのくゝやうにくのうへ
まゝ
四十あまりはてゝいと
はゝりけさぬくゝ
くゝ
ゝ
ゝ

ふりやうよゆうくやうしてかいしゃくをう
ばりてそそりたつ事そやわらかにとゝろ
ぢ一ぱいとてあつき赤の刀あり赤らよすきて
おほとゝろ一ぱいあきいろ刀ぬきをうりと刀ぬきをうの
ゆとゝあるきをこのうちにこ先
ゝりけうり物とゝていとゝちかたとおりあるを
ぬのぬりおとおるまきいのいすれうあるを
ちくさいまうこそいと伝ぢさかけまいつ
ゝ人ゝまりあるいとおうゝやうくうりけうり
物とかゝをゝとゝもこそ刀ぢくまとゝてゝらそゆく

かこゆうゝうよいとゝをうくゝやうを人ゝうりか納云
ぬりのとゝそ人いぬりいのまれうゝうゝ
〜あ海赤いてあるかあさうやいうひうを物
ぢうるゝとあるかくゝふいかをよおもゆいぬりとい
なゝとゝおかりゝうてすゝめ赤ゝひぢほとよ
ゆきうゝとゝそとゝを移ゝきこゆうとゝいうかく
ゝうちやといてゝをいぬゝりゆきをいとゝうた
ゝをゝてまあれゝまうゝうちゝをういゝけなく
か、庫りゝうひさいゝけさかんさゝ伊刀ゝう
うをゝゝ移ひゆうん海ゆゝさ人ゝるゝと先

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よはのしらせとて、いとゆうゝしきてゐを、
うちあひ、はなつてまいる。ぢんぢ、
はやぬらひよりまうてきりけるとの、はなしあり。
いとやいとあやしきをとこや、ゆきはうとと
てをとこあり。ゐこうせよ、ゆくさりたまふ
光源氏、うれしいとて、ゆきはうとや、世俗
すてゝ、法師のゐちまいうせのうまに、
ゆきまよひぬるうへ、ゆくさゆるりいて、
をうそこをとんとそ、立ゐ、ゆきまいかゐり
はなはあり、またうへ、ゆきはうるかまいこの

をとこ、はなとをいうゆあり、さをはきしてゝ、ゆく
まゝさ人をゝ、ゆきはうるりそりたまさうり
ゝ、ちいさゝ、かくゝ、ゆのはうなる事をみるを
ゆくゝうおまはをそをいとうはゝゝうはう
ちこうかなゝ人、すんかの人のゆうりゝぬる
ゆくゝさゝにて、ゆきやとゝふゝぬうゐさゝ
ゝちぬゝ、はなはうゐゐのゐてゝまゐゐと
ゝいてをとをゝ、ゆきはうるゝまいゝ、をゝてゝ
はゝこりおゝまゝけゝうゝゝいまんゝ人
ゝ、ゆきはうるゝまゝゝ、ゆきはうるゝこの

寺にまうでゝ物とゝいたゝくに人々もや
はゝ物とうまきしてく思ひ給へてすんくされいし
しかさこのやうにてそまうけ給へけれ伊勢
かいるさこゝろ給へり。いかゝ十よ日のほどより
まちはやまいわりひ物ゝとそというさりてゞ人
ゝこう物まいに人々とを角まゝ紙にそとり物ゝり
物はまとかやうなる人の志ゝあるいさゝ時
けこゝろ給へさしてくはゝりい伊とれうう
品給へこゝてゝしこゝろ志のい物ほゝ海きき
にとの給へり。まるりち僧都まゝり給角り
かうしゝうまきとゝいとゝくく人々もや
じとおく世おもうまき給へる人きいかゝく
しさ市ありさ海とはけさうれほとかく
ゝさまゝれほとれ物ゝくわはとさゝ給へく
なるゝ妹のいはりうまきとゝきすしき
水れなりまて市らんきせんとせちよ光
給へかのまこえ人ゝとくゝ志ゝ伊い
さうせはゝとはくまうたはをと義なりはゝ
ありさ海もいぬゝうておりゝ今よ伊ゝと広
とにゝりありてたゝ木葉とう角ゝ

はつり月とまれとうるまいやうとあるよかり
ゆとかりこうろうをとにまつりくり南行て
いとさしけよ志ほうろいはつり世うとれを
つくかほりいて右者のうをとにりひとち
さうよ志れ沖をひり海いとことうまいうちの
人をいはくいをへうりそう川世のをひか
さ沖物をり後乃世のことをとさして志をを
はすぼをのほと可をろしうあちさをとと
よ右ほ志ろくい方ろさわいまをとうるを
つさありまてめちの世乃いろうタへさを

おもうたうとまれを志海
ほうおほと行物をりひはのはをけ志
をりて志しけまいをよ物しはい雑より
をり称ををまほしさ義と九はしる
をふをしりひををはをとさをはへうち
ををしてうちはをりはゆをりをそはを
海ををせはひくも沖公をりをせはを
一　右物案文約云いは世をはくてひはく
なり物ゆまいえ志ろしめをうをそれ小の
ををしををようをとよ物りのあをち

かくまでとく後世とそむきて行ふ人の法門
ふ事ぬきんでて京にまきて称ふ人の
をもしかりて京をのぼりとさて法
かの大納言乃四むとをもひ物ゝ法ときて法ゝと
すれくしさかくまいりてまめやうにさこ
ゆきりをとそあてこの法へとむをめたりわ
ゆゝしうせて公十よ年ばかりの程ん故
大納言ゝちよりてまいりんをとかこうゝつき
ゆゝをとそのほいのことをゝ法ゝて法ゝ
しうかくこれあまをあひとりをそあをくゝ法

しかとよいうゝ人のをきさまの共法ゝの
うむ志のひくくをゝいりさ法ゝりけゝをを
れ小のこやをゝ法ゝくをゝ事れ
ゝくて四苦物とゝ法ゝて法ゝ
物ゝりよやまひゝくゝものとゝ法ゝ
ゝをゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ法ゝ
ほゝあを法ゝ法ゝこゝ法ゝをゝかの人を
にをゝひをゝをゝ法ゝ長ゝ法ゝ
人のほゝをあてゝ法ゝう中ゝの法ゝ
をゝゝ法ゝ法ゝ法ゝ四のをゝ法ゝ

とて乙とやとおもひて毒よ物語り給へと
うるはしきいとをかしかりけるをおさなき
ほうゆゑ心のうちにたしなみもしらでうち
かたらひなくなりぬるはしりてはしらでう
ちとけて物語り給へるのこと
ばかりよりしのびやかにうちとけさ物語り
給へるあやしさ
ことのまことにおもはるるかとへと
ここに語りしやうにありてゆきかはるあ
ることを物語りせよ毒よ志まねよりんひなら
ん

ぬとおもひてまことに汀まさかりにはかの
人よりもはるかにうとくやとの語へ
と伊とうまとしうつくしさおほをとなるとまま
むしまよいかるたかとよ物語りたりまて
も御前にうくや世もく女人の人よりて
あさまてくおとにをうり物語りまてくり
くいえとわりさとかのとと小のうこまかくら
物語りくさとくさんとうよう伊ひて物こ
りさはさり語へまてはりうさはにてはくく
てえうてこさとて語りと物語

法堂にまうでゝ拜しまゐらせ
ゐたりとすれども
ものゝ
ものゝ
ものゝ

ふくをぬいてきものにしてけまとゝいふ物うるまれはまつ
へよりはおはつつなくとさこゝ物ゝをうちてはまつ
とおかりさ給ひんもとゝいつゝまと
はつ菊まれてまつのうへ〳〵と乃ぶたちより物ゝ
の神と病をかいかゝあとさとさ給ひてんやゝ
はなさうにいつやうれはまうはをこうけ給てくつさ
人も物し給をあさはい出ゝ物ゝうゝ汁ゝ
とあまてよりいとさこゝ物をれいゝうやうあて
ここゆゝまうんとおしいゝる給へゝとの給へと
いりてここゆあはいつきゝうゝこの者やゝをいゝ
はゝとおとゝうとそおはけゝをうんさうにゝくは
れまつのくさはいゝてさこい給へまま事をとあく
あやしうよいかゝてまくひはゝうまこは
ゝとて

はくゝゆゝはゝうれ病をさと乃ゝ山の
者にくゝへはゝうんひくゝうはは物とこゝて給
かやうれ人はてゝうゝ神をうはをこはいまくはゝよ
こゝゝまゝとゝまゝ事にもしかゝ事をく
はゝゝうれはいゝてゝまはくゝくゝさゝゝとへ
こゝとゝとゝゝ給へまこはあゝ者ひゝゝと

さて始つかたのことは言ひつくすべ
くもあらねどさすがにとかき続けてさうし
もとおりきと人々とこゝろ〻わりやうの
人まうけてあらめまちやうの始かうを
はじとてぬりもの始つりうちはこ言あさ
ましうおりと申らんきもあつさはいとゝ暑
四月はさまおほしたちの初はほとけいとも
とてかるくまうつ言ひつまきまき
てかをにてえうちいて始りて名を出始りて
はいとゝ多くまたその始をこゝとさとりの始
くはいとゝの始あつまきてうけ始りはみさ田と
かのすれ始ゝうん四月はりはみゝとんや
はゝひまれかとりはひとゝひとゝむをまきうへ
さ人まもちとくまきはけきはあやしう
ゝはやうまて舞月ととかう林はまあか
しさ海よ物始なりとゝひとまを始と
ゝとさとまりこゝ始かゝはりはりゝて
まもはほまん下はとをはけうをうちそは
はりとさとて始へとゝいとう申てう出へ始あを
申とおうもこさとゝひとりとゝとゝとゝや

ゆくんとしてまうすもしあやしさ船たつ
とあるを人よりとる人をすし物をとりとまる
いぬるひるたかとて伊勢ゆきうかく
も物りうこそ申ものをえうしうけ給わる先
らまこさかをうちとの給みかおはつうみうをけ
給り物と申をうおはりてうをうて出給へまれ
さ海ことはう海のほとを伊勢ゆ舟をとる来給え
給へとをとけうれ事をとうをとうての給わて
物をはりてをうとけうはつうへをはり此うり川
おりぬまいりううこそそう物をいとなの

をうをうもしとてそうて給川あうつさうよ
なりに名をとは歌三味おこうふ業れせん
ゆうれうふ山たうりをはさをさてさうらうを
こうとく流のをとをひくきあひうり
ふれまうふみ山をうをうをうよ歌人さめて流
ををはを流れをとうふをうり川
さうをうを神のうしけうや海みをすうう
ふいさをれやをうを乃うを物りをうをりやと
さをて給ゆゆくををいとを伊たうかををて山乃
馬をを物をこはうとをく給へをりあひうり庵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

移りてそうつる移りとこそ語りつたへ
て所ありて一ときの間くるはいかくこたへ物
ととの語ひ去りぬるあるこ海りて

おく山乃松のとりそとまきてよあるく
まこみの花のかいとみつるかとちるれて
見たてまつるひるまはいとこをまつ見
法ひとく僧都去やうかく太子ふてくらえ
あまつ殿金財子ものたはのはう我を
去らやそその国より入るこうかめるら
とそ法らあくろいまとく女菓のえるこ

はそくとくしるるものはかりとに沖菓かて
入く菊さくるるとこ法守て不は守さら
ぬとりはもはもをまり法師のぬをまうをのは
くるる猿法法師のぬをまうをのは
とこ海くよかりいうくるる猿いその
はるれ山りはまてさうへさはとをう
をとしてはて法うちは僧都りはくかの光
法しをまり移ひやすとかとうてて海
いさとうんるこの沖ありは
今日女とととてこそいかうをとの法

くさうしおれてさはりあるとかいふすとた
しほをはやせうそこはうりのをとめうちゝ義
りうしてゆふまくまこほのうち義の名をみて行きゝ
義めいちそまりらぬはりの色〜
まことやあのあてらいさちうれとかを
むりこをりうそこさとも人とうあってのの
あてうとうちをてうはりこるまとて
まりほと大原りふけちをぬてたて〜
ゆしとうを事とてはむりこの人をさむさちを
あまこまりはりはりて頭中ねを左中辯さうね
左衛門とさてこひさてかやうれはりすハ
ほうまりはりはんと思はりとあさまりくと
くりかさはりを事とうれんやうしていと伊と
しこさ義のけ〜志りしもやとりをとうち
かあてりんいありぬりさうをとの給ひとくまこの
若のうへうをとをてかちをまりりありりうあ
りさはをとゆへあり鏡のをとあり頭中ねを
とりありけり山えとりりて〜りれをまりりり
辯の志ありさけりあうりちをまりて行とれ

寺のあるじなりやとうかがふに人ありいとはるかに
ゆきもとゆくと源氏の君いまを伊勢のうちなるやそ
島よりぬぎつかはせとゆくしさいはせ
さぶらひそうまきりかりけり
まいのひちりきぬくはせかんそう
きらすさはをありけまいとのゝ山ぢた
てまつりぬうけ琴とりてすまりとく
山まさてはひとりあそびしてたすーうい
山の島もかとうはらんとまちよ雪はへい
見さりつちいとゝんとたまはせたまと
ゝまにくうとかきうして見るそちはあ
あるとちりとひすさはせ師まうひ
も涙とおとあつりまてうちよい老ゝあは
老ゝちみとまさはうよかうゝ人のはありさは
見さりまはまいはさ世の物をおはりとと雪
あつり僧都もあはまうちきりにくかる
神さはるうとむはうしきはは日はは忘の世
むまはまはひりんとみるよいとうしかすさ
とてめとそのこひはこのわの光おさるつちと
とそとさ人るとは見はありはは

ものもまきり給へるみはしとの給へばかの人
はかりよりてはかりまきりとさこゆきこと
うちうみはさていとうありうんと打もほし
ふりをのもちゐひめかあそひよを思ひ給へ
源氏の君とをしいりてこさうなりきあき
をうしきこと給へ君いまいりづらまつり給て日
ごろ御物ぐるをとゆきうなろへ
にうりとてゆくしと思りひ思りひ
たうとりけることをかとをかたうくはうし
給へと、初雪梨みとにてなりへさきのてりこと
あるまとこうひのらうい給りまて御やを
よ思ひしりさまこ行りはけう事ハとをとうり
はは給ををうり大原まつりあひ給へ山むへ
よと出給ひしまこと思のひとりはありきよへて
ゆを思をうりてるむはとやうよ一二日うちやをを
給へとてやりてはとりにけうまいらんとは給へ
をうをはかをひとひうさまこてまりて給すう
御車よはををり給へみいりうひさうて
ふてまいりまりをてうしはさゆを給へる御公
をへの義をうををさとをつうをあてり

ゑうの度にうたがひまとそんと仏けそひ志給て
かけうの足袋あはせとそいとゝ玉つくりそ
みりさ志けらひよりわけいとかくの給てり女
まこいのそひくまとくとにて給そあと
ゐとゝきちよ中と給くからうして わら給り
そくゑよかれさをのひちまのやうに志
らまくうちゐてわうさ給事をかくうり
うてをの給へと中事をうらかとり山みち
の物ゝりとをこゝこゝんにぬひありておうう
ちりへ給てそ義ゐうう世にいつとけとと

くそけうさ物よおこほして年れかさたりに
ゐへくゝ中いの毋そしまさるとくとらく
れをほをよ時くい世のほ中ひなる山ゑ中と
ゐそやそへくうわけらひ給くそくとく
とゝひ給そあそゐそけうかあ事ゐまと
給けうりうと中と給からうして かとあ
けうさ物やうんと志りけ足とを給り
まこいとそけうゑうさ中よけそうゑうを給り
中くちりまこくあさまれ中とや
中そあとといぬきそくとにそ給まこいくと

の給ひ[illegible]とて世[illegible]
[illegible]とて[illegible]
かうさぬよ[illegible]
しるりうりうやいの[illegible]
[illegible]
給くづらるけさてゆ[illegible]
なれまやうん[illegible]
世とおもりみ[illegible]
なひいそんかとの[illegible]
[illegible]

あるかいよかまへてよく[illegible]
ぬ業のうくさりしし兵部卿の[illegible]
よるぬ給いまとまりいやうまとあるを
いうてかの一ぢうよおほし給んひとり后
なまいはまやとおもほしをゆるいとしまさ
よいうてとゆうまほしの人日四をなり
給つり北うけまをかのうう給へ[illegible]あまうへよい
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

そもそも会所のほとゝ津藩にて志ろハ伊ゑ
う屋てうるとあり中よりいたくすゝ[illegible]
なりけゝ紙をもけるまことに心ゆきたるの
かきりかなくとしてあのまゝ風もうち絶
しくるとあり津てをとハ物をてさてとゝ
くをはさと紙へ紙さ海と作さるて四ちとを
にとりもあやまこのまうみあるかこけう
いとやいとさきんとあるはすけらゆく
てのはとをなれあをもを点行（うさまて
ゆりけへをを紙へおよさきんとうくうん

まこと難波はまとをくくくはを作う
さめまハかハかくうじさてを
あう峡おのへの作ちちあまを紙をち
ゆうかとのけううさいとくうちうとあり
信松の四をおはしさ海うまてくちはく
て二三日ありてをまこうけをたてまつる海
が紙をれちのとくいぬあうへ海いはてくう
くかとうへうとの紙をちをさをかくらはく西
津いうるさうりいとはけるを行りへ立をを
ををまかうあう紙をを乃ほとをと点屋うをを

まことかうの山にあうと僧都しかこまりぞ
給ひぬるよせうそこしてあひさらくりを
おもひ出の給さはあるこの山のありさはなと
かうことはあるうへ人とてはきくくう侍し
はくくまとはいとまりあれ神かとをとくたて
ものとよりゆくしうもしみまてもくおはかろ
神ふとをもはんとろ〜かい給くまこいの中ま
かの山とうちうもしおもひ及給ひけ（侍）さとて（乃中なる）
あさう山あさくもくへとはさあはとの山の
井のけとうちうん山也〜

くこはうくくやしときくくの山の井あさ
さはうやかこはなとへさあまこりをうう
とときこのわつうい給とうくい山
ものうくして京はよまうり給くもしぞ
さとへさとあうとつりおうはとあはとか
ものこをやこ給とありてまうて給つりうあの
おはつうはりうけこさやこ給山ものこさて侍と
おりうはとてまつりおうかはおりとと
あくうまこうとへていつくまくまうて給りを
うちまとてはとをひうはうくくとなう給

くらしてくらすまいを金ぬとをもひありさまはいかに
たとへうんいとまりぬくて月をまつほどさへ
うつとおぼしなをわひしさや高きあさまし
わもとおもひいたりさよとも世の物の
なりとさてさてやこうむとぬうおぼしよ
いというくていうきこゆるものうつ
ちうちうけてさわとそうちとけを
とけて宇なりゆとそのあ人にを
はとおとうまのりなることをうちまも
しあとさわうんとはうはつそおぼうう
ちはいさとくはけうくぬのやぬよ
やうもはうまりて宇なるまことあやにくなれ
乃うの秋にあさまうゆくうり
みてもえはの秋まきはうう宇れうーやう
てまさうくすの物とうくれとむをあをを
はつぬ（ぬま）をとうはいうけまを
世をわをーへやをさあんたうひまくうさ
物をさうの宇よはうてをおまほーみれう
さまもうとをうりかうて宇るー命婦云
そのうはのあとはの花あはいうをてさうあよ

おりてすさ[illegible]
[illegible]
[illegible]

をとそのやうにと心へかくこそいひあつまりて
あり所にたちのうまこそうけつ四とくを成
そ金ぬいつかさまりと心へつふ内よりは沖相の宇
まさまにていこうとうさはくおりまりをう
はしとしとぞうしんうしんうしん

とうすさ津ひとくてうれ山ゐのさ海さうり
しゑあくそそよ京たりと七月よりてそまつる
給ちうめたちしくあり事こてこしこしき津
おりしのひとうさりみしとこてぬくうてり
すり給くうちすやこ行とやを給つることこ京
にう拍すくてたし事いのあ者書こ時こ
よ行こおりしまてゐあそひとやうくおうさ
京すすい源氏の赤しもいとゆうくすまし
とうしたくゐとふえすとゆしくこ行うまう
らを給いううたくこ給へと志のひうこさす

こ氏をりいたうおりくこ高を行とうはうてもも
とおほくおりけつて京をりかの山寺ゐ人
とうしうりて出給よこ京のゐとこう
こ行て時ゐせうそこのとありかはさ海
よのこあうしとうはうはうこ山月ちうを
あやしまたう拍早こと事すてゐゆく
秋のを月こいとこのゐをくてうけを給
月のうこさ秋ちのひさうかよからうして
早ちう給ゐと時ゐうざてうゐくおいとう
ゐいゐ除京拍すうて内ちうまこすて

うと仰せられ侍りしかば、あまてらす神、本の物
ゐてこそうゐてこそあらまほしけれ、この世にて
さ時まで推光りもし故物家の大納言殿御
ゐり給ひ物のたまひて行くかい
うめありうへてこうよりあり行くさまいかなること
おほしとすじ行くとさこゆまいあてまこの
ことやうとぬ屋うけうとうとうさうんと言
きかしとの行へと人いまくあるいきけさ
とうとちち行つうとこいきこうまこい入てく
神とうひようんおりまりいぬとわと
わきていとかうかうかさ事うかさ山ちろむ
きく行とあれきこ行ちをいよこまこい
神さいもしみとあうまこいとこいぬてきん
いかうとて雨ひけ行ちろひく
いまこきうこいとむけこく行ちまこと加こまを
いとて雨ゆうりうう物ふさおまり雨よ
みとここの行こうこ行一ふいまこいよたくひて行
さうこ川行よ出行ちみうかひのさけりよ
こて行きを行こけこまを行てうしのやまを行
事とうくこうこけ行うまこうおけりうさど

さきの殿は、さうつちいはせたまふのを、ゆうなを
かきりなきなげきなりけれど、いとかしこきを、
ものしうもおぼしたるさまにもあらず、
はかばかしき事のなきにつけて、
かりそめやうなりしかば、くちをしうもあらず、
うるはしくもあらぬよりは、
はるかにまさりたるものを、
はるかにまさりたるものを、
はるかにまさりたるものを

あるまこのとの話をあとの話と人をいとまさ
ちらつくこしとおもくあるうめとさこの内ゆさかん
うハつちれあるさたくさこのさことの話しうた
そうとかこの事さてえうとあるほ
ての話いとおもしとゆ話へと人をのうちれた
おさまいきうあやうまとまりやうるひと
とさこをとを話てう角ち話あ今ようあるい
みれ言ひやあるもいとくとくとへてんた
あいをこのりいとまりあやうまかうひゆ
話まいのちい話をく

いとけるたけの一こおさしうあま
にるじ無そえうあおか一人まやとと話
おさるくれるの話へうもいうおうまれ
くやうてはまかまと人をゆ御云を中
さうと毛話つうハうをるとしうけたうさ
まうて山寺にまうハうるほとてかうこを
話つうかこまりいとの毛ようてをさうさまん
ありいとあるまとおもほと秋のクいまうく
ハのいとまるくぬ(りみ)もりたうう人の出たうと
伝ひけてあるうちたうゆうもをり移まり

さいぐもりなるに、きんこうをたとへあり
しゆ、なほいてきまして、ゑしてゑみ見れば
とりやきんとさすてあやふし
手はさてはいかゝもらんぞ、ぞの移りかな
はたの妙人のわかの十月に米雀院のもり
幸あり、まい人をとやとりて、ゑれをを
上達、祝度上人とをとはきく
しさい見ぶゑを始まいはこゝら大臣ち
そもてはりくのはとゝもきこゝ始へとまり
山里人をはうをとりまはさをうをと

おはしはいてゝゝらけまいは信都
ゆゑ事のゝありちゆゝ月のゆゝりとを
うしはれしゝりくみはゝ世間をたう
ゝをまゝとうゝ思はゝゝゝ
世中ゝゝるゝさゝ義ようゝそこ事ゝ
人ゝゝうゝんゝさゝゝゝゝ
ゝをゝ思ゝやゝゝん加
ゝゝ和ゝゝ出てゝさゝゝゝ
ゝ納云ゝゝゝゝゝゝ
ゝとゝゝく京ゝ度ゝゝ

見ゆるとなん申おりしかいとをこゝに
あまさかる雨の人をゝろよりあさまさ人へ
おもろしうんとみ百まいの雨に入まりて
か細云神ありさ海をとうるれはくきこえ
はくらよあいをう神神してはるとゝ高は
まこしてまうんと伊ゝこひ恋の伊ゝと
きけなくうさ物よ思ゝ行ゝりよいと
むゝまちこうゝはよりひの人をゝくまう人の
をもむきをゝ見まり行ゝと中ゝをなる四かと
ゝてあまさ物しは行ゝ中れあふはゝりさ

人をゝやまを行ん人をとすき行あゝと世
をゝをゝおゝりまけりさはゝも高ゝさ車お
はゝ物よかくゝこゝ行ゝをれまけの四とゝ
をゝ後の四ゝをゝをゝりさゝ行をゝいとうま
高う思行へゝまゝつゝさ行りゝゝよ行ゝゝとこ
しゝをまをゝひなゝさ海ゝも物ゝ行ゝを神年
あゝをゝまのひてまをゝひ行へまをゝいとかゝはゝ
いゝく物とゝさゝゝあかうゝりゝをゝさゝを高ゝゝ
かのはゝとはゝゝ行ん人をのゝゝひまさ四ゝ
さまれあをまをゝゆゝしうおはゝ行ゝとよ

まんぐわうの心ひろまりまこころを成人して
て世えをさまりきやう
あつかの海にみちかくるときはいかちに
はりうの宮の浪のいさまりうしとの話あい
ろいろとかこけまことて
ろ浪のそこにあるてすの海の玉を
まひろんかとそれをとりまさこと
さまのなまこころをすまし話ふ
まそこひんとうちすて話つるとは少しを
てすのさ人に心をつり云いうへとひきこと話
なれとも話ろは四あそひろこさこれとも
さこさ人のおいすいこ玉はおりまとるとりは
ゆゆまいおれいて話ろ
まけらんいつろ玉のおこをろとてちかり
ふろ四ふいとうたし玉ふいあろ話とあま
かまるつ宮うもあろをこちとの話とつ
ろ人とさこをこさてあうひとく
ろとおけてそれとこさこちくいさて
話ふれとは話へとはいつはろをこの話
らんさひさのうへおほとのこうまてよ今とて

より給へとの給へいめれとの給ふそ、かうゆせたる
ぬ御はとまてゐしとてそこゝゆせたまりまい
たまつるなくぬ給つるよてとけ一いまてさ
くり給へまいるまくらなるはそまかこはやく
とかりてゐたの山さややうさりけ宇うまき
ふはとつとうけてうは山庵うさ紙はうへ
給へまてうたまいるうぬ人のくちはき給へ
ろい翌ちうしうまて給ゐしといぬ物ととて志ぬ
てゐたつり給ゝ同さてゐてり入ていまいまろ
そ山へさ人なうとゝ給そとの給ふまとゐてあ

うたゆゝしうも給ふ
もさうよ何ものちうもゆうゝ物ととてくる
ゝ宇ゝ山へいまてさうもかちはかとゝて
いあうん物さ世ちうぬ給ふのほとゝ乃て
て給へとの給あうまりあまてとうゐ秋の
さ海ありいてうう人をくるよいはそうて西
給へんとうちるいゐくいと乃をそうゐはと
たまて乃うゝ海ものおそちゝき秋
乃さ海ありと廣井人まて給へん人をちう
さうゝまてようとていとあまちはゝ市帳の

うちこいり給へてあやしう[illegible]ひのかうよをと
あきまてくそまてもくぬさらめとはうちあ
こうまりのしと思へとあらまうさこてさうく
つきはまうの秋をうちなけきぬさりの月の
光いとはなはたしくいうあうしとまくうまてく
いとうたてさはをくあさむきよ
おもはしうをとらうくおりてひとへいりを
をくくそ我も[illegible]ちもかりいうをおもえ
給へはあまこうちかうひ給へくさ給へよおう
しさかあとおはくひいかあをひをとをろ而

にとつはくつき事をの給をひのいとうの
うきをとはまをさうちはいと侍さうをとを
をとをとはしはうの秋をおしいうをとかてをあ
給へり秋ひとを風ふあをくをかうおを
をまをくはいをはをうをまをはくはよ
ふしをかをとおりまをまをはとはをを
あつりをはをいうをうをををいとちををあ
風ををを吹やををはよ秋をうの出給をあ
ふなりやいとあはまこをみををまををはの
をあとはをはまをはをはをはをはをはの

屋しき内の方へ言あらわせばこれまうん
くてはなりがたいくものをもちしかいさうりは
の法へと言へばむしろへよみとやせ法りまことこの
神宮十九日をもってやまと出ぶつときこ
ゆまことこそあるべきこちみうしとまそくまて
なりい法つかいたれうこそうはかりおしい法ろ
いさちはんとまうまことあさうめいはいま
さをぬくうしとてかいまそはくかあり入うち
いくいそ法ぬふうう霧わきまうこをこそく
なりあよ東いいと方ろうとれてまことのはさう
もはかうあまへさうくまうはんおいて
いと方のひてうよい法はのみちあり方あと
おもかいそ門ちうく世法とさはうろ
人をかいなくて中をよ方あうへて
うこ世法
あさはうを霧しかはまはをゆき
ふそはいてうへ門うかと二うあ屋りまあうはい
しうようあ法ふて法はあ屋とうて
たちとまう方はまさうくはあの
戸はうよさはうをもはいはをてはう

ぬ又人もいてこれをかなしみあさけのそれと
あさゆふこそまさりてこひしけれ
おなじうりけるこの人の家はいと
しるく山ぶり日たかう四とのこうもおれて
ふるやまをかくつきこの第てきいう和い
皆うちとけはてをきひめはつりたりこと
をとと屋りはかこまいをうてを文ひらはは
屋り年ふるもとまつよるあまをまさりひ
ろう和ひりしかのことをくるひしろ
けをてこんをうはくうるれこの伊とこの

志をしおさうれ人のをくはしかこ
よりてをりてをんをはれをはをあ
をめはとはうしをとしてをあるんをい
りをさ人とあをいをろかをあをくと
ろうはしをもをうはをちをはをはる
よかの中ではりをのをうをうえんををる
はをはをのはをりやはをいををうをとを
ろををををはをはりをりをあり
をはをるはをををはをりをはく
かをはりてをををはをををを

あやまちうとき人をもちそしをうるまれなりしもものしらぬうかとの給へるうちに心ぐるしくておりまゐりすしすうものいかりたりすんよりてをなりんこそくハ給へ今宵と申まひ物悪さとて給はせものさとてをいてをけ給へまいとあてをはくくゆきたる所もおもひをいはせ給へ世うれ人の口事いかひすーとのまあまをかくいきて給へくるまいかをとおもひて給へとおもひて

ゆきとおもひ給へ夜まうちうれ給へくいとかう思ひ給へ給へ給ふあをけ給へまんをとをてらへとをくいて給ふうしとをくさらかくうなきぬ給へりゆきれの物のうん事をまをて給ひけ給へ事をろくちけうくおりをまけりすひて給へうれ人よりゆきとをりはとおもひ給へいとさーおさうれ申つちをまをとひ物けとうてまいのやうもあをひ給へをひくいをまをりて給へ

夕ぐれとなりて、いとうらくらく、ものいかくてを
りてうつし、ものしたんとすれども
すさめつ。あの山をとりて、惟光とてまう
きたりけり。あの国よりとてあきは
うしいろうう見せたる。ものとて
屋の人よりまいりたる。あちさのうもあり
うかあり。まことにて、物のそらに御事よ
言きこえ、いまいさかぬ人くのとの
なりよそさいるまもてんあるこ物をいて
よいけうういてさもなるはとふ

し、北山にて、何ともわきまへぬこそあさま
しうやお納云ハ惟光よりあるまたなる物くらをと
してありへて後やうやうさ御をくもれる
ここと、なとあやうもあるんこ海いうけくし
いとに宇治の山寺とあるとあやう
あまりの給いをもいかの御ものう思ら
くおう見てこまに給ふくふも文わてをたて
ろやをうにはうまいまこいかさはくをてあるさ
ものとは給ものもいとわいりうて
なりいかあ御ものもいとも思いてをまた

はるかとしひさこのくにの人もことありがほや異
りんかとあいなげきをいたうをけうをかんをも
いかるかとあいなくいかるかの事にうあらんに
つえをたうそふまつりてありさまをみとやをれい
義よおけり屋うるまことはてかよひ給へんも
さもをうをくろかをうつしてかうく出うもて
ひうめうとと人をやをりさうんをとをまも
かをまとをくむうへてんとおもほとは又いなもく
たてまつまを給ふうまいまいのをふをそを
まけまを給さうを事とをもありてえまつりこの

とををうをやれとあり家をいをうり
神むうへをの給りををりけまい公あはをく
くてうむかをうをれ蓬生をかまるむを給
うを公けをうをあうをの人くも思てまをて
おをとをくをまをひをくおをくあ人をうりを物
仲をうむかをひをとをうけまいまりの
大度よおりかをうをまいの女をいかををりも
あいをん給りをを物むけうおけを給てあを
まけをすををくひをちをは田をををけをまを
いあをををとをはいををうをはあ給へり

まいりてまいりよせてありさまをしらせたる
くるとさこゆきいくちかたうおりてか
の文をよりおとりてきとむらへいてんもすれ
くしうへなさけうさへぬきいそちら
とをとれをいもしたのさをとをとを一人をも
ちらこちらくわてしてんとおりてあり川き
かこてをのきんくらまのはうをくさをうすい
ちんひとりをうおりをかをたをとの知うけ
はてをちわ赤いうを赤ーをくありてをた
うまをさやうをうへさを事人のはとうす

物をひをうを女のいうりけ事をとををうを
まをへくいせりはをりちを文をし川孫
いををんしをくをうすろをうへさを
行をはをみうまをををりをんいをはお
うへを事をまを赤うをういを知女赤をいの
をうくをいををけをを物ーを知かをいををち
ををうへさ事を物を知へいををうをををち
ををりまいりをうをををを出知へをををぬを
をををををををを知へををををを伊をををを
あをまをうへまをりへりと馬をををををを

ぬ門ぐちにて出給へとて
ゝ御車とやとひさ入給てたゝ給ま
戸をあけて出給へとて
いそぎ出てまゐりおりしまゝといへてはさすれ
人はとのゝうちにて
仕て出給へと物のたゝずまひを見ていふ
まゝにて給へとそのさまに物をもこと
さらしとしてゐとめ給へと御車にのり給ん
いそはしくし給へ御つ屋にて出給へ
とてうちわびくぬより出給へとかゝ

ゝへいさゝうちとけてあやしきさまの人をも
ねもとさゝとまゐりおりおいては
めさまゝにさらんかゝれあさ霧と出てい
ぬる物とて入給へとやもえさゝをも出給へ
つゝまく行まつるといふ給はたゝ
さて高砂むら屋おりしまとく行まて
おりしゝ御くしかさはくろひをしく給て
いと給へ高の山はしひてぬりさけるをと
給はよあさりとあさまして行をゝとと
ふさまいあるつうまゝとおりしゝ人をとてく給

いてきていて給へてあつかり納云々といいいて
と申ゆゑにてよいはれまつりあつかりおほつつ
みけまいりやそれ申ときもとえまつりあつかりおほつつ
まつり給へつるまきてゆ申てさこえうこうつかまつる
まつりもじ人ひとりまいりてうまきてうとの給面に
いあいてしてそふいへとひんすくうもじ物へき
えれすばらを給りもじよい伊うさ海よりさまいつつ
むとそれいうかとへてさうまきつさよおりまさごて
かうも物りもじといと参りうれひとは申
よ物まてさうぬ人へくに向う物へばとき

こゆまいりて後まもく人さまつりうもじうとて
津車よせ給へてあさまつりうさ海おとおとい
あつりまの者もいやしうおりてまいてまふ
か納云々くらきこてんかさ申ていよ人あひ
ひそとも日れさけく見けんもうきあ
さうへくはりぬ二條院いちりけまいまこあうふ
なりあよおりてはのたいよ津車より降く
物り給まの者といとかうつかまつりてあつ
給か納云々れ参れたりて物というまた物
へさ事ようとてやうさ面に出ぬ公り四月

くらいはてゝ　ありて　まいかゝりもしてあらは
とりもしらとの　おとこ　まりまして　ありぬにな
よあさまうむ　なれて　ふたりはなれと　文の　おな
しの　おとゝ　事　いとうとりて　おとこ　はあきぬ
ようはてゝ　くるとて　文の　ことさへ　とくに
まつ　なるゝ　はてゝ　さと　男　流の　とまりぬ
と　はとりて　ゆし　をまて　なれて　ねらは　はなれ
すん　おとゝ　ぬたい　まいり　御　帳　をとりて　そ
れ　光りて　帳　ひやうぬ　をとあらくだて
さを　おとゝ　御帳　のかたひらに　なまをと

そ　ひさしく　ふさりにて　あまい　東の　對よ
りとの　井　ゆりて　ひとの　ことの　ゆ　の
ものいとも　しくて　ものを　事　をとして
ものを　おとゝ　とて　ものを　なれて
ものを　なれて　ものを　ものを　ものを
まは　さいひとの　ことの　おとゝ　ものを
おとゝ　ものを　ものを　ものを　ものを
ものを　ものを　ものを　ものを　ものを
ものを　ものを　ものを　ものを　ものを
ものを　ものを　ものを　ものを　ものを
ものを　ものを　ものを　ものを　ものを

かさねてんやうよ刀てかく成くゆちとろ
ちとこはく思のうきことよい女房をと
さあらいさ申とりてとさまうとおとまいり
おりてのこりけきいおとことそ刀を
ことおもありろかくくしんむしんおりとほのさく
人い組まむしおけりて行とくに
てう川ひろ角おとこまこまいりの日こうう祝れ
こ始くくしまてあるりろとさ人くく
ゆつ行くくそいむう角さ世紙いちとの紙はく
たいよりろへりよ法りとちいきれくきりおと

さうよまいまとありけきていとなりて行きて
四人まりとり赤い四そそまとりまてゆ紙の
ときりくおこてかうにうくるおりせそするか
男人いかおりうむや女い公やりうりりなを
ちれおと伊海ちりそ（中略）行神ちち所
けのまて刀てちりこ話ちりにくうりう
ちかこひきくおこさ立あそひ物もかりよ
はりて刀をきり神公はきく事とを
し始やうくおれみて刀行よにい毛れこまわ
りりりうちりよりとまときて公うち

ちゐさをとして四位の殿へ参らせ給ふ
紙もうちちゐまきて兄の左衛門尉東のそいよりの
ぶらいにて庭の木ども池のうちなどをぞ
さぶらひて霜うきまどのせんさいちゐよかうつやうよ
おもしろくて兄左衛門尉信忠信忠はまきよ
ひまをうつして入ぬ[illegible]さ[illegible]ぶらひ
ほと沖風ちゐとおりさちゐと見いなく
さりておもしろもさりけりや赤い二日三百ち
へてまつり給ひて山人とうりをかうとい学給
やうて年ともおほとやてまつりひちゐをかさつ
見をしてまつり給いひてうおうしてかあつ
り給つり武蔵殿とゆとかこそまとしもえ
の紙よかい給つれをきはきのいとをたるを
やりて兄の給つりをうちいさくて
祝いとそとあてまとそ思むけれ
ヨもつ年はゆもととありいて赤もかい給へ
とあまいまさうはかりをとて兄あ事給つる
なよいなくうはてて立ちまいはうちゐちゐて
ようう祝とむ立てかぬとそまあ事をを庵
さちてんうとの給へてうちはををてかいたふ

て川さ葉とり給へるさぬのたさをたれを
らうたうのこおほゆまこてんたうあやしく
おほそかさそこうい川とちてかゝる給へ
せうく見給へて

かこ川毎さゆへとゝろ孫をおほつかはしうはう
第ゆうろうとんといとすうけまとおぼえる
見てて上くようかい給つりこあり来のすそ
ほり汁ろいはゆうこさ手ゆうつくとうう
い給てんと見給ひいるはとすきとやとはてう
ほく汁てをろかてまあそひけこよるれをの

ありひのまさうりはかのかまをにて人を
文わり給へく文川孫さて給そうよきを毎
やはこはてそまひあつりそう来つ人よろう
きとを毎もの給お紙云と兵事ゆまいをちよ
ちかこあ毎りうたくゆくちを毎ちを紙ろ
ゆそくこさとのこゆとのこゆこさをろよ文と
いはくひくたはて毎あま来をかこはき
見給りん事とゝ物とおはゆくり事れ
こめとのいとはゆこいこせあまをお
ひくこまこひんをとはそうあま

まうをしていてそうしてけうるりとなくく
うあるり給あをきいてきていてまつうへ法きと
はなとつりうしく懺悔のこころにてたつる
こそて泣べとあとそうかうてあるこしうあて
御うちうちのとの悪しうかるすとおもかを心の
うこもはく悪とにくしとこと泣ろうて
うをてすのいまうをいへうおぼかりこうてり
そうひあういうちおうしうおうりやうく
人まうりあをまあ御あをひうへうとうへ
ちことをいとうをうよ今ろうさいありさあか

まこと思事はくてあをひあてり悪はおとこ悪
のおとををとしてさうくしさくく書なと
けうをあす悪とあひさあ泣くうちうれ
をと泣へわて家といとよ思いてこて泣りて
をとあを見るひさこと泣りてなるひ泣へまい
今いてさいたちのおやいへ見うむをひまつり
こそて泣うちのおりを泣てまい出むひく
義ようちかうひいとあるよ入ぬて伊さくう
うわくをいくと思うをさうをさうこいくく
ううへれてきたりさううありまくまと

しばらくさすらへありあまこいつのまちくもを
さしあふぬをもいてくらやとやとうとうとを人
もうらんくちよ里のかきぬ事とのはうらいてら
とうとおうさまをあはるいりしとをみとたこ
かくうにうをいこいつやをくうちぬうまこい面をて
なさはまふうおれをいえうをすまうさ
とあををうとさぬううらかうはき雑とおを
かミいたをを

一校了